

## 王 鐸 論

A Study of Wang Duo

中 田 伸 一  
Shinichi NAKADA

### 一 二つの王朝に仕えた文人

王鐸は万曆二十年(一五九二)に河南の孟津で生まれた。わが国では、豊臣秀吉が朝鮮に出兵した文祿元年に当たる。三十一歳のときに科挙に合格して明王朝に出仕。天啓帝と崇禎帝の二代の皇帝に仕えた。しかし内憂外患の山積していた朝廷政治は行き詰まっていた。特に満洲族の政權(清)との戦いによって戦費が増大した上に、飢饉、災害、失政などが重なって社会不安が増大した。崇禎十七年(一六四四)春、李自成の反乱軍が紫禁城に迫ると、十七代皇帝崇禎帝は遺書を残して自殺した。間もなく、明朝の復興を目指して南京に福王政權が成立。王鐸は次席首班として入閣したが、政權そのものの基盤が弱く、内紛も加わってさしたる成果もなく、翌年五月に清軍の軍門に下った。王鐸は北京に赴き、発足間もない清朝から高官として処遇された。その七年後に六十一歳の一生を閉じた。

王鐸のように二つの王朝に仕えた官吏はかなりの数になるが『清史列伝』に伝記を持つのは一二〇名である。三世紀半以上経った今では、過去の人になってほとんど話題にのぼらない。ただ王鐸のことは書法家の間で語り継がれるだろう。

二つの王朝に仕えた高官のことを「忒臣」(てしん)と呼ぶことがある。東アジアでは忒臣の評価は伝統的に芳しくない。「忠臣は二君に仕えず」「忠君報国」という人倫思想があり、そのタブーを破ると節操が無いとみなされた。明末清初には忒臣にならずに自殺したり、清に抵抗して殺されたり、郷里に隠棲した高官もいた。そういう生き方とは異質な忒臣のことを、逆賊とか偽官と呼んで軽蔑する人もいた。

天は二物を与えずというが、王鐸の才能は文学や芸術の分野にあった。

現代日本のように専門分化した世の中に生を享けていれば、政治にかかわらず、晩節を汚すことはなかっただろう。明代の科挙官僚には政治の中枢部で活躍できる機会が多かった。王鐸は大官となり政治に深入りしすぎた、あるいは、政治と距離を保つのに失敗した。晩年は深い後悔があったに違いない。しかし、そこに明末清初の時代性や王鐸らしさがあると私は思う。西欧の近代科学や宗教に接した進歩的な漢人のなかには、伝統的な価値観に縛られない自由な思想が広がっていた。

王鐸は情熱的な芸術至上主義者であった。それは芸の幅と量に現れている。詩・書・画いずれの分野にも豊富な作品が残っている。詩については「五言詩は万首に至る」と言われた多作家で、現存する選集『擬山園選集』には四千九百首余りの詩が入っている。現存する書画は六〇〇余り、他に刻石『擬山園帖』『琅華館帖』『柏香帖』がある。

書法の評価は昔から人間性の評価とセットにして語られてきた。例えば前漢の楊雄は「書は心画なり。」書は心を線にあらわしたもの。後漢の蔡邕は「書は人性を稟(し)く。」書は人間性を受けて表現する、という。こうした見方は今も支持されるだろう。書は徳と芸の総合表現であり「人品即書品」である。こういう観念がある中国では、王鐸への評価は自ずと辛くなる。

選りすぐりの人材が集まる朝廷には、一流の文化財があり、社交界があった。乱世のなかで王鐸は詩・書・画の技芸を磨き、乱世の苦悩を経験しながら芸術の境地を深めた。小さな道義よりも、芸術という大義を優先させた。旺盛な創造力から生まれた作品は、結果として後世への贈り物となった。司馬遷が生き恥をさらしつつ『史記』を書いたことを連想するが、王鐸も大義のために小義を棄てる晩年があった。しかし、王

鐸のデリケートな心情はあまり伝わらず、武臣という一局面における政治的な履歴だけが問題にされ、誤解にさらされた。王鐸の伝記史料が不完全なものであり、かつ偏向しているからである。

## 二、王鐸伝の偏向性

王鐸の伝記は、正史に準じた扱いをされている『清史稿』の列伝巻七十九にある。しかしこの伝記は、中立性を欠いている点で問題がある。第一は政治的な履歴に終始しており、人間性や文人の素顔についての情報を欠いている、つまり偏向している。第二は、伝記の編纂過程において武臣を裁く意識があり、公正ではない。伝記の文章は次のように始まる。

「王鐸は河南孟津の人。明の天啓二年の進士。庶吉士を改め、編修を授けらる。洊ねて少詹事に陞り、經筵講官に充てらる。崇禎十一年春、中庸の唯だ天下至尊の章を進講し、旁く時事に及ぶ、の語あり。莊烈帝其の敷衍支吾し、精義を發揮する能わざるを切責す。鐸惶懼して案前に俯伏し、罪を待つ。」

王鐸の出身地を記したあと、三十年の空白があり、天啓二年（一五二二）の進士及第の記事になる。その前の人間形成期について何も書いてない。「崇禎十一年春」から後の文章も唐突で、すんなり読み解ける文章ではない。この調子で政治的な履歴を羅列しているのが国史の書き方である。

高官となつた以上、政治的な評価にさらされるのはやむをえないが、明末清初の動乱期には、特有の社会状況があり、そのなかで王鐸の政治的な行動を考える必要がある。とくに李自成の乱との関係に私は注目している。故郷の河南はこの凶暴な反乱軍によって甚大な被害を受けた。ガン腫瘍のような反乱の拡大は、飢えた民衆の反逆の結果であつた。それは飢饉、天災、明朝の失政や過酷な徴税などの要因がからみあつて悪性化し、最後には、李自成が紫禁城に乗り込んで王朝に止めを刺した。この勢力を圧倒して紫禁城を奪還したのが、異民族の清王朝であつた。

王鐸にとって不倶戴天の敵を滅ぼしたのは清であり、清に期待する面が

あつたと思う。

清朝の発足当初には政権基盤が弱く、明の降臣を積極的に登用して、彼らの経験や知識を利用した。しかし、百三十年ほど後になって、乾隆帝は国史館に命じて『武臣伝』を編纂させた。『武臣伝』は二つに分けられて『清史列伝』の巻七八、巻七九となり、王鐸伝は巻七九に収まつた。（注一）この経緯によって出来上がった伝記には、王鐸の美点など記録されるはずもなく、専制君主が臣下を裁く意識だけが根底にある。もつとも、これもまた時代を知るための史料には違いない。これを含めて、他の伝記資料を参照しながら、本来の王鐸像を探し当てるしかない。その伝記資料にはどのようなものがあるか、書き出してみる。

- 一、史伝 『清史列伝』巻七九（『武臣伝』巻八 王鐸伝と同文）
- 二、墓誌銘 「故官保大学士孟津王公墓誌銘」（錢謙益『有学集』）
- 三、詩集 『擬山園選集』
- 四、刻石 『擬山園帖』 『琅華館帖』 『柏香帖』
- 五、題跋・県志・府志・書論・画論・同時代人の雑著等
- 六、年譜 『王鐸年譜』 （注二）
- 七、伝記 『好書数行』 （注三）
- 八、書画関連 『王鐸書画編年図目』 （注四）
- 九、同右 『王鐸の書法』 （注五）



写真1. 『王鐸年譜』の表紙に使われている自画像。美髯の持主であつた。

一についてはすでに述べたとおり、乾隆帝の意向をふまえてきただけに、歪曲と偏向を含む。武臣の履歴は細かいが、人間理解に資する記事が欠落している。

二の墓誌銘は、当代一流の文人である錢謙益の書いたもの。彼は王鐸と同じく武臣であったことから、政治のことには触れず、文人の目を通じた記述になっている。深い人間理解がなければ書けないような文章を含んでいる。例えば、

「公の人と為り、学に于いて、才に于いて、品に于いて、則ち又た焉（これ〳〵書法）より大なる者有り。……古今を苞孕（ほうよう）し、典故を囊括し、經史の源流を弁じ、斯文の体要を萃め、或いは一揮して数制、或いは一飲して百篇、行けば即ち口占、臥すれば則ち腹藁、人は曰う、公の学の博にして敏なればなりと。」

その書品を誉めた後で、それよりも学才と人品のほうが優るといふ。即ち、書芸は王鐸の大きな人格の一部分であると理解できる。そして、次の文などは、エネルギーで闊達な知識人の面影を彷彿とさせる。

「史局に官たり。史事を以て長を擅（ほしま）にし、坊局に官たり。公望を以て重きに倚（よ）る。崇禎先帝に北に事え、講筵に啓沃し、辺計を論列し、鑿鑿として竅言を為さず、弘光皇帝に南に仕え、忠直を奨護し、禁錮を疎解し、媿媿として以て自から処する有り。人は曰う、公の才の明にして允（まこと）なればなりと。」

王鐸は翰林院では国史の編纂に従事していた。「史事を以て長を擅（ほしま）にし」とあるとおり、歴史に詳しくかった。職務に誠実であり、北京の崇禎帝、南京の弘光帝に誠実に仕えたと、錢謙益は記している。王鐸の晩年の行状については厳しい指摘がある。

生平の規言規行、動止は常有り、既に北廷に入り、頽然として自放す。粉黛横陳し、二八通（たがひ）に代り、旧曲を按じ、新歌を度し、宵旦分かつたず、悲歡間に作（おこ）る。叔孫昭子為るや、魏の公子無忌為るか、公の心口自から之を知る。子弟は敢て間を以て請わざるなり。

「諛墓の辞」という言葉がある。墓の中の人におもねる意味で、金品を

積んで依頼される墓誌銘などには、曲筆や溢美の言葉が多く、故人の不名誉な履歴には触れないのが常である、という意味である。錢謙益の言葉は、諛墓の辞ともいえない友の老衰と空虚を写していると言えようか。

三の「詩集」は王鐸の内面を知るには欠かせない。宮廷人として時代悪をどれほど悲痛な思いでみていたか、救いたい状況下で憂鬱と無力感に苦しんだことがわかる。ところが王鐸の詩集は、乾隆年間（一七三六〜九五）に禁毀処分を受けて抹殺された。今に到るまで、容易に見られない。私は台湾の学生書局から出た六冊本を見たが、大陸では、北京図書館古籍珍本叢刊として出ていると聞いている。

六、七、八、九は現代の出版物。九は日本の出版物。（中国にも同種類のものがいくつかある）その巻末に掲載されている、福本雅一氏の解説した文献は、一の史伝、二の墓誌銘、五の各種資料を含んでおり有益である。

本稿は、先に挙げた文献の七、八、九の最近の研究成果を参考にしながら、1（乾隆帝御製の『清史列伝』）の記述の空白を埋めて、王鐸の実像を窺うことにする。第三節、第四節、第五節は主として伝記をたどり、最後の第六節「武臣の由来」で全体をまとめる。

### 三 孟津の人

王鐸は明の万曆二十年壬申（一五九二）に、河南孟津の双槐里というところで生まれた。孟津は南に洛陽、北に黄河と接しており、河洛文化の発祥地として知られている。武王が殷の紂王を討つために八百諸侯が会盟した土地であり、漢魏古城もここにある。北邙山には、光武帝劉秀の墓をはじめ、王室貴族の墓が集中し、「生は蘇杭に在り、葬は北邙に在り」の言葉にゆかりのある土地である。「津」の文字の示すとおり、昔から渡し場があり、隋の煬帝の世に運河が開鑿されて、江南まで航行できるようになった。唐の王維は次のように詠んでいる。

家は住す孟津河 門は対す孟津口

常に江南の船有り 書を家中に寄するや否や（雑詩其一）

明代末期に河南を旅行したイエズス会の宣教師は、孟津には触れてい

ないが河南は果物に恵まれていてしかも安い。河南第一の都市開封にはイエズス会の教会堂があり、かなりの信者がいると記している。(注六)

メナードはまた、洛陽には福王という親王(万曆帝の第三子、朱常洵)が住んでいて、「その暮らしぶりは国王なみに豪勢で権威を備えている」と書いている。民衆からまるでかけ離れた生活ぶりは、地域住民の怨嗟の的であった。のちに福王は崇禎十四年(一六四二)正月、李自成が洛陽を陥落させたときに殺され、財宝はすべて奪われた。福王の息子、朱由崧(しゅうこう)と王妃はこのとき明の高官となっていた王鐸のところに助けを求めた。手厚く保護したことから、朱由崧は王鐸を恩人とみなしたが、朱由崧も父と同様に自堕落であった。朱由崧は万曆帝の孫であることから、明朝滅亡後に南京の臨時政府に祀り上げられた。積年の恩義に報いようと、王鐸を次席首班とするが、朱由崧は酒色におぼれ、政府内はごたごた続きで泥舟同然だった。王鐸は失望し、辞表を六回も提出して帰郷しようとしたが、すべて却下された。朱由崧との悪縁は王鐸の晩年を汚す一因になっている。

ところで、書家になった王鐸の落款には、故郷の名前を冠して「孟津王鐸」と書いたものがある。その他「洛下王鐸」「洛西王鐸」という例もあるが、洛下は洛水の下、洛西は洛水の西のことであり、孟津に他な



写真2. 孟津王鐸(落款)

らない。別に「洪洞王鐸」「太原王鐸」といった署名もある。太原は六朝時代の名族、王氏の出身地である。

年譜には、王鐸の十世の祖の王成が山西洪洞県から孟津に移住してきたと書いてある。かつては二百畝の土地を耕す富農であったのが、王鐸の父の代にはわずか十三畝を所有するだけだった。父親は王本仁、字は性之、号は梅園といい、農閑期になると読書する生活に甘んじていた。

陳氏との間に五男三女があり、王鐸は長男で、四人の弟、一人の姉、二人の妹がおり、十人家族。祖父の長兄は万曆二年の進士であることから、後続を期待する意識が王家にはあつたに違いない。

家族の多い農家の暮らし向きは貧しく、一日に二回の粥さえまならず、六歳のころにはひもじい思いをしながら家事手伝い、牛番、鳥番、弟妹の世話をした。母親は嫁入り道具の金属類を市場で換金し、家族の飢えをしのいだこともあつた。王鐸は親の苦勞には孝行で応え、牛番をしながら黄河の砂地で木の枝を筆代わりにして字を習った。富豪の息子たちが私塾に入つて読書を始めても、王鐸にはそれができない悲哀を味わつた。

十三歳のときに初めて王羲之の「集字聖教序」を臨書し、三年後には手本に迫るほど上達した。十四歳で私塾に入つて読書を始め、舅父の陳具茨に師従して詩文を学んだ。土地の語り草になった、そのころのエピソードが残っている。

少年王鐸が玄帝廟で読書をしていたころ、書写の腕前が上がつて大字も結構書けるようになっていた。ある日、廟の一室たくさんの人が集まつていたので見ると、修理したばかりの玄帝廟の匾額を知名の書家が書いているところだった。一尺四方ほどの大字に何人かが筆を執るのだが、満足に仕上がらない。見かねた王鐸は名乗りを上げた。大人たちは少年の申し出に半信半疑であつたが、やらせてみることにした。王鐸は大筆を揮つて紙の上に「玄」と書いた。周りから、いいぞと声がかつた。

続いて「帝」の字を書く。書家も「うまい、うまい」と喝采した。何やら騒がしいのを聞きつけた廟の主は、少年が人垣の中心に立つて廟名を書いているのに痾癩を起こした。板で三回ほど痛打した。大人があわてて止めに入った。書いた字を御覧なさいと促されると、老師は自分のそそっかしさに気づいた。王鐸をふりかえり、続きをじっくり書きなさい、と言った。王鐸はすっかり氣勢をそがれたが、思い直してまた筆を執り「廟」の字を書いた。しかし、前の二文字ほどは力が無かつた。特に、左払いが少しゆがんでしまった。こうして書かれた「玄帝廟」の匾額は今も残っている。

さて、十六歳で官立学校に入学して読書を始め、科挙受験のコースを歩み始めた。家計の苦しさは相変わらずだったが、思わぬところから福の神が現れた。孟津から東へ二十里ほどのところにある、花園村の馬從龍の娘との縁談が持ち上がった。とんとん拍子に話が進んで、王鐸は十六歳で結婚した。岳父の從龍は河北香河知県で、当時四十二歳、嫁は二歳年上。今ならば早すぎる結婚だが、幸運な相手であった。王鐸が必要とする学費は、妻の実家が支えた。

当時の庶民が出世するには、科挙に合格して官僚になるのが近道であった。しかし、合格までの道のりは遠く険しかった。それは時間と資金と能力の勝負でもあった。明代には受験生の裾野が広がったことから競争率も高かった。説明は簡単にするが、進士の前段階を「貢士」と呼び、その前を「挙人」、その前を「生員（秀才）」その前を童生と呼んでいる。いわばピラミッド状の階梯があり、上になるほど狭き門であった。

明末を知るイエズス会宣教師の言葉によると、地方試験（郷試）の合格者である挙人の段階で、名士とみなされたという。「すぐに偉い人と目され、礼遇されるばかりか、畏敬されるようになる。そしてどういふわけか富裕になるのも早い。」彼の家族全体の境遇が一変し、隣家を購入したり、立派な邸を建てたりし始める。「数は全土で千五百名」（注七）これらのエリートたちが、三年に一度、丑、辰、未、戌の歳に北京の貢院に集まり「会試」を受け、その合格者だけが皇帝の前に進んで「殿試」を受ける資格を得る。

王鐸は馬氏の内助の功を受け、科挙官僚になるという目標が定まったと思われる。

結婚から十四年後の天啓元年（一六一二）八月、王鐸は郷試に合格。冬から翌年にかけて、北京広安門内にある報国寺に寄寓して会試の準備をした。舅父の陳具茨もこの寺を訪ねて激励した。舅父もまた三年前の進士に及第していた。北京の貢院で行われる会試に合格すれば、皇帝の前で行われる殿試が待っている。時の皇帝は替わって間もない天啓帝（朱由校）十八歳。殿試では不合格者を出さない慣例になっていた。つまり、会試が実質上の最終関門になる。三月の会試では見事に合格、長い苦学

の末に金的を射止め、舅父や父母の期待に応えた。殿試の結果は三甲第五十八名という好成績であった。

#### 四 内憂外患の王朝に立つ

王鐸が進士に及第して人生のスタートラインに立ったのは三十一歳のとき、六十年の生涯の半ばであった。科挙試験は三年に一度しかなく、受験者の多さと競争率の高さは相当なもので、家庭環境がしっかりして、資金と時間に余裕がなければ通れなかった。それだけに、合格した後の生活は劇的に変化する。天啓二年（一六一三）の及第者は四百九名。三甲第五十八名という成績で、翰林院庶吉子になった。庶吉子は「文学優等にして書を善くする者」という条件を満たした者に与えられるポストで、ここから何人もの宰相が出た花形の官職である。庶吉子の同期生三十六名の中に、倪元璐と黄道周がいた。世人は「三狂人」とか「三株樹」と呼んで、特に注目した。書法史では三人それぞれ明末を代表する大家になったことは奇縁と言えよう。

王鐸は三十一歳、いわゆる而立を過ぎて、學術文風の濃厚な翰林院に出仕するようになった。当時の朝廷には内憂外患が山積していた。

東北の辺境では、ヌルハチを指導者とする後金、後の大清が南下して明軍と対峙していた。一六一八年に明との国交を断絶し、翌年のサルフの戦いで大勝利を収めた。明軍の損失は戦死者四万六〇〇〇人、馬匹二万八〇〇〇頭と言われる。二年には瀋陽と遼陽を攻略して遼東の平野部に進出し、さらに半島の先端まで支配した。なお、ヌルハチは二五年（天啓四）に首都を遼陽から瀋陽に遷都し、翌年に亡くなった。その跡を継いだホンタイジは、種族名を満洲（マンジュ）と名乗り（三五）年 国号を大清とした。（三六年）

明朝にとつて、北方の脅威は年を追うごとに増大した。その脅威に備えるために必要な軍費は、農民の租税に依存していたから、増税の上増税するほかはなく、その負担は上層から下層へと転化されてゆくのが常であった。

皇室の浪費も財政を圧迫した。例えば万曆帝は、自分の陵墓の造営に

六年の歳月と八百万両という大金を使った。いわゆる定陵と呼ばれる地下宮殿は、明の十三陵のなかで最も広大なもので、全長八十メートルの地底に前中後の三室を設けた。万曆四八年（一六二〇）七月に亡くなると、豪華な副葬品と共に葬られた。

朝廷内では廷臣が党派をつくり、反対党との間ですさまじい泥仕合をしていた。東林党と閹党の党争である。東林党は万曆十四年（一六〇四）に、無錫に開設された東林書院に集まった知識人が中心となって広がった党派である。これに対抗したのが、宦官と結びついた閹党である。天啓帝（朱由校）は、閹党に属する魏忠賢（一五六〇～一六二七）を信任した。魏忠賢は政敵を弾圧し、東林党は多くの指導者を失った。天啓七年八月、後ろ盾となっていた天啓帝が崩御して崇禎帝が帝位につくと、魏忠賢は自殺した。

王鐸は東林党のなかに親友が多かった。そのうちの一人、喬允升は故郷孝津の先輩で、万曆二十年の進士であった。王鐸が受験勉強をしているころ何かと援助をしてくれた恩人であった。他に、呂維祺は河南新安人で万曆四一年進士、孫承恩も河南籍で王鐸の尊敬する先輩であった。錢謙益は親しい先輩、倪元璐、黄道周は親しい同期生であった。

崇禎帝が帝位につき、魏忠賢の一派が政界から一掃されて、明るい前途が約束されたかに見えた。しかし、崇禎二年（一六二九）のころから絶望の時代が始まったと、歴史家は見ている。宮崎市定氏の研究（注八）を要約すると、

崇禎二年は清のホンタイジが万里の長城を越えて始めて北京を攻撃した年である。崇禎帝は驚いて勤皇の兵を招集したところ、山海関の前線を守っていた袁崇煥が紫禁城に馳せ参じた。ホンタイジは志を得ずに撤退した。帝は袁の忠節を称えた。しかし、袁が前線を離れた隙に前線では異変が起こっていた。手薄になった防衛線が崩壊し、要衝を清軍に占領されてしまった。この失敗によって、袁の評価は失墜した。清軍を国都近くまで侵入させたのは袁崇煥の手抜きではないか、と人々は糾弾したのである。悪いときには悪いことが重なるもので、袁崇煥の過去の疑惑があげられた。崇禎帝に謀反の罪を問われ、翌三年に市中で処刑さ

れた。これに衝撃を受けた配下の武将、祖大寿らは、兵を引き連れて錦州へ逃げ帰り、やがて清朝に投降した。このとき城内にあった大小の火砲三五〇〇台が清側に渡った。

袁崇煥は崇禎二年に、渤海湾口を準備していた毛文龍を殺したことがあった。その結果として山東半島に移った毛の部下の孔有徳は、数年後に反乱を起こして登州を荒らした。しかし志を得ず、舸に大砲や略奪品を載せて旅順に向かい、清に投降する事態になった。このように、防衛の前線の内輪もめにより、不安の連鎖が起こり、結果として明朝の弱体化が進行した。一方、清朝は寝返った明軍の兵士や武器を吸収して強化された。これが絶望の時代の始まりであり、朝廷には救いのないような絶望感が上下にただようようになった。「天子の失敗はこれを輔ける大臣、温体仁の失敗である。」と宮崎市定氏は指摘している。また、絶望感の背景として「崇禎帝の初めから、既に歳出入が破産状態に陥っていた」という。

国内に目を転じると、自然災害が頻発して民衆を苦しめた。崇禎四年から五年（一六三三）にかけて、河南は寒波と長雨に襲われ人命が失われた。王鐸の『擬山園選集』に次のような言葉がある。

「壬申夏秋、吾が郡の淫雨は七十余日、廬舎を傾圮（けいひ）し、人を傷（そ）ない禾を害す。因りて憶う、辛未（前年）に雪ふること五尺、凍死数百人あり。」（五言律詩卷十九、十四首連作首述）

「昨年七十日雪ふり、凍死する者半ば。今年八十日雨ふる。房崩れて河灌く、死者は紀すべからず。」（卷七「与孔瀾除抛荒状」）

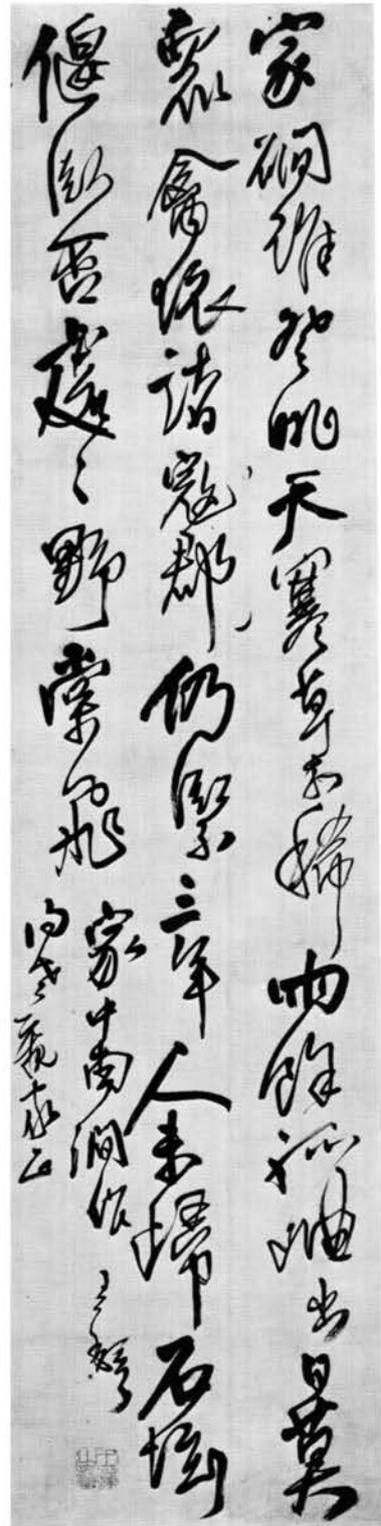
この年はもう一つ、農民軍が山西から河南にかけて荒らしまわり多くの犠牲者が出た。こちらは流賊の無法行為、いわば人災である。『擬山園選集』七律卷四、連作八首の首述によると、

壬申七月より十月に至り、晋寇約七万余、太行石城を奪つて下る。

孟津を去ること止（とど）まらざり、济源・河内・武陟・修武は、殺焚の慘、流血は川と為り、林のごと其の尸（しかばね）を積む。募兵に一の戦う者無し。国家は士を養い、其の实用を求むるも、則ち竟に此くのごとし。

紙もて捷奏を上るも、徒らに披覽に勞せしむ。……良（まこと）に流涕

写真3. 王鐸の書（故郷が流賊に荒されて廃墟になった様子を詠う五言律詩）



〔釈文〕家誰誰能。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸寇（郡）郡（寇）仍緊。

三年人未歸。石壇偃臥否。處々野棠飛。家中南澗作。得老親家正。王鐸。

すべきなり。予展転して計無く、郁塞発憤して此の詩を作る。

晋寇、つまり山西方面から流れてきた賊が武装し、各地を転戦しながら河南に迫ってくる。その数約七万。非常事態にもかかわらず「募兵に一の戦う者無し」これではなすすべがない。「国家は士を養い、其の實用を求むるも、則ち竟に此のごとし」人材を養成すべき国家に人がいない矛盾。「予展転して計無く」悶悶とし、憤激に堪えない思いを綴っている。頼むべき明王朝には問題解決能力がないことを痛感したに違いない。

王鐸は農民の子として苦勞した経験があるので、民衆の苦悩が手に取るようにわかるのであった。

流賊の大発生は、明朝の政治の破綻と社会の矛盾の深まりを反映しているが、その実態はどのようなものであったか簡単に触れておこう。

明末の農村には、重い税金に苦しむ人々、災害や戦乱の犠牲者が増大し、反乱や抗争が頻発した。反乱の指導者の一人に李自成（一六〇六～）がいる。彼は陝西の米脂（まいし）に生まれ、二十代のときに盗賊団に加わってから成りあがった野心家であった。彼が率いたのは流賊であり、根拠地を持たずに街から村へ略奪しては、その戦利品を配下に再配分した。

人員を解雇、それによつて職を失った人々が流賊に加わった。凶悪な流賊の増殖は、結局のところ、皇帝を頂点とした体制の矛盾が現実化したものであり、政治の破綻を示している。

流賊が荒らしまわった明朝の末期には、河南の八郡のうち、黄河以南の五郡は朝廷からも見捨てられた状態になった。『明通鑑』（巻八八・崇禎十五年）に次のような記事がある。

河南の凡そ八郡、三は河の北に在り、六年の蹂躪の後、患は少しく紓（ゆる）む。其の南の五郡一州七三県、連歳賊を破り、残破せざるは靡（み）し。再破三破する者あり。城郭は邱墟、人民は百に一を存せず、朝廷も亦た官を設けず、間に設くる者有るも、敢えて其の地に至らず、遙かに治を他所に移す。

写真三は、崇禎十六年二月に書かれた王鐸の長条幅であるが、その文面によると、故郷の洛陽一帯が「寇」の支配下にある危険地帯となっており、王鐸はその間隙に身を置いていたことがわかる。

### 五 身を捨つるべき祖国はありや

王鐸は官僚の座にあつても、在野のこと民衆のことに深い関心を持っていた。小規模な地主階級の出身であることから、貧しい農民の生活者の視点を持つことができた。文人であることから、現実世界の出来事を観察し、内面化し、詩や書に託して言語表現することができた。しかし、

ここに参加したのは、第一に飢饉や災害、悪政や重税などにより困窮した飢民であり、第二に治安を守るべき官軍からな脱走者や反乱分子、第三に駅卒（通信交通運輸シテムの現業員）たちだった。政府は崇禎二年、財政上の理由により六割の

文人が観念世界に対して人一倍の影響力があるとしても、現実世界を変えられる力は乏しい。幸いにも、官僚であった王鐸は、政治的な働きかけのできる足場を持っていた。

王鐸は進士及第の後、天啓二年（一六三三・三三歳）に庶吉子に任命された。二年後に翰林院編修に昇進した。翌年、南京の掌翰林院事に任命された。崇禎一〇年（一六三七・四六歳）少詹事になり、太子の輔導（東宮侍班）を務めた。

王鐸は内憂外患によって、天下が動揺し、社会が暗黒化してゆくのを深く憂え、官僚として問題解決に向かって挑戦する気持ちがあった。次の一件は、経筵講官となつて崇禎帝に『中庸』を講じていたときに、話が本題から外れて天下の危急に及んだところ、天子の逆鱗に触れたことを示す。

崇禎十一年春、中庸の唯だ天下至聖の章を進講し、旁あまねく時事に及ぶ。白骨林のごとしの語有り。莊烈帝其の敷衍支吾し、精義を發揮する能わざるを切責す。鐸惶懼して案前に俯伏し、罪を待つ。

（『清史列伝』）

進講した中庸の一節とは「唯だ天下至尊のみ、能く聡明睿知にして以つて臨む有るに足り、寛裕溫柔にして、以つて容るるに足り、……」のくだりで、聖人の徳が外に現われ、人々の目にとまるものになつてゆくことを説く。王鐸は本題から外れて時事を語つた。そのときに「白骨林の如し」という不吉な言葉が、若い天子の自尊心を傷つけたのである。

王鐸が日ごろから心を痛めていた、地方の惨憺たる様子を天子に伝えたい気持ちがこのような言葉になつた。崇禎帝は気に入らない臣下の命を奪うことが多かったので「鐸惶懼して案前に俯伏し、罪を待つ」は、とつさに感じた恐怖の表現であつた。しかし、帝は王鐸に罪を下さなかつた。なお、『清史列伝』はこれを「崇禎十一年春」のこととしているが年譜は同年秋のこととしている。

この年の七月には、楊嗣昌が進めていた清朝との交渉方法について反対意見を述べた。国境地帯の緊張を緩和し南下を食い止めるために、金銀を贈つて撫和する（なだめる）策に対して、国益に反するとして皇帝

に上訴したのである。『崇禎実録』によると、

「秋七月丙辰、翰林院侍読王鐸上言す。朝廷に撫和の議有るを聞く。愕然たるに勝えず。朝廷の積威を損じ、金繒きんそうの輕拳を修む。臣の大いに惑う所なり。」

これを知つた楊嗣昌は怒り、王鐸を廷杖の刑を加えるべきと上申した。この情報が王鐸の家族に伝わつて皆驚き懼れた。しかし、刑は執行されなかつた。

この深刻な体験は、王鐸が事なかれ主義の官僚でなかつたことを示している。しかし、王鐸の進言が当時の大局に照らして正しいかどうかは判定できない。朝廷内には「官僚は天子を信頼せず、天子も官僚を信頼せず、官僚は互いに官僚を信頼せず」という不信感が蔓延しており、朝廷の政治に直言する忠臣はいなくなる危うさを含んでいた。また、「当時の官僚政客に共通した中華独尊思想が横溢していた」。（注九）とはいへ、清朝に金帛を貢いで和平を買うことに強く反対した王鐸の論拠のなかに、中華独尊思想があつたかどうか、なお分からない点はある。ただ明らかなのは、信念に基づく進言によって、身を滅ぼす危険をじかに体験したことである。

王鐸は三カ月後の十月二十一日に「銅雀瓦硯銘」という銘文を書いた。魏の曹操の宮殿である銅雀台の瓦を材料にして硯にしたものが銅雀瓦硯であり、それに銘文を寄せた。哲学的な含蓄がある。

胡なんぞ瓦を以つてして之を棟に躋のぼせ、之を淵に沈ましむるや、胡ぞ吾れを以つてして之に几を授け、之を筵に升せ、之を匯に水ひたすや、而して胡ぞ浴雲飛煙を以つてするや、又何ぞ此の後の千百年、誰が主と為り、誰が為に妍なるかを知らん、物の遇合するや、且つ然り、孟津王鐸銘。

この月、近郊に清軍が迫り、京師は嚴戒態勢をとつた。十一月十七日、四女が北京で亡くなった。翌十二月二十二日、次女が亡くなった。王鐸は上訴して帰省を乞い、孟津に帰つた。

明王朝の統治の及ぶ範囲は年毎に狭まっていた。崇禎十三年（一六四〇）西方では、李自成が河南第一の都市、開封を占領、次いで洛陽を攻略し

た。洛陽は万曆帝の三男の福王が藩邸を構えていた。福王は捕えられて処刑された。

十一月、王鐸は難を避けるために一族を連れて移動した。先行していた家族が、二千の土賊のなかに囲まれてしまった。王鐸は二十五騎の勢と共に囲みのなかに突入して救出した。

『孟津県志』はこの年のことをこう記している。

十三年、大荒。斗米銀5兩。人相食む。土寇四たび起く。

李自成は一六四四年に国号を大順とし、官僚機構を整えて長安で独立した。李自成は朝廷内の情報をつかんでおり、敏速に行動した。明軍の主力が北京を留守にした隙に北京城を包囲した。城門は明の宦官によって開けられた。崇禎帝は二月十九日、紫禁城の北側にある煤山で自殺し、三百七十年余りつづいた明帝国は滅んだ。このとき王鐸は河南の友人の別荘に滞在していた。

李自成は三月二十七日、皇帝に即位した。旧臣の多くは李自成に迎合して出仕した。一方、抗議して自殺した文官は二十一人、の中には書法史に名の知られた倪元璐がいる。即位二日前の三月二十五日に、一族門下十二名と共に殉死した。しかし、李自成の天下は四十日ほどで終わった。五月二日に清軍が北京に入城すると、来た道を引き返すように、西へ敗走した。紫禁城の主となった満洲族の指導者ドルゴンは中央集権体制づくりに着手し、年号を順治元年として、十三歳のフリンを即位させた。

明朝が泥舟のように沈んだころ、河南にいた王鐸は避難するために水路江南へ向かった。蘇州・南京一帯を漂泊した後、六月十三日に南京で弘光皇帝（福王）に拝謁した。南京は久しいあいだ副都であったが、北京が陥落してからは、ここが明朝再興の拠点になった。曾て明朝に出仕していた文官武官が相拠って、万曆帝の孫である福王を担ぎ出した。王鐸は南京に到着する前から東閣大学士に任命され、福王の補佐役に抜擢されていた。しかし福王は問題行動が多く、天子の器ではなかった。王鐸はかつて朱由崧が賊軍に襲われて、濡れネズミのようになって逃げ

きたのを助けたことがあり、その腐れ縁が重臣として入閣した一因でもあった。政府内では相変わらず派閥争いがあり、清王朝に対抗できるだけの力はなかった。

王鐸は南京政府の行く末に希望を持てなかった。この政府も滅亡の道をたどっている。政治家として身を滅ぼすよりも、文人としてなすべき仕事をしたかった。政務を捨てて南京から離れるにも、福王の許可が不可欠であった。王鐸は南京在留期間中、六度も上訴して帰郷を願い出たが、すべて却下された。

順治二年（一六四五）清軍が南下を始めた。揚州や嘉定では抵抗する軍人も市民もまとめて大虐殺をした。いよいよ南京が危なくなると、福王は蕪湖へ逃げてしまった。五月十五日、王鐸は錢謙益以下数百人の文官武官らは城を出て清軍に降伏した。政府の要人であっただけに王鐸への風当たりはきつく、直前の十一日に市民から暴行された。五月二十五日、福王は清軍に捕えられて南京に護送されてきた。かつての臣下は拝謁したが、王鐸は直立してこう言った。「余は爾の臣下ではない、どうして拝謁するものか。」

順治二年（一六四五）八月、王鐸はかつて明朝の天敵であった清朝の支配する北京へ行った。翌年に清朝から礼部尚書管弘文院学士、明史副總裁を授かった。順治六年に晋太子太保、二年後に少保、順治九年三月に礼部尚書に就任し、その月に亡くなった。

かつての友錢謙益は、晩年の王鐸について悲しげに次のようにいう。

既に北廷に入り、頽然として自放す。粉黛横陳し、二八暈（たがいに）代り、旧曲を按じ、新歌を度し、宵旦分かつたず、悲歡間に作（おこ）る。叔孫昭子為るや、魏の公子無忌為るか、公の心口自から之を知る。子弟は敢て問を以て請わざるなり。

清朝の高官となった王鐸は「頽然として自放す」る放恣な生活の中で、遊蕩三昧にふけたように錢謙益は書いている。しかし、現存する多くの書跡が証明していることは、晩年はさらに芸術への傾斜を深めていることである。

六 弑臣伝の由来

王鐸の本性は文人であると在世時から言われていた。談遷という在野の史家は

「鐸は本と文士、処るは其の任に非ず。」（『北游録』）  
本性は文人であり、宮仕えは畑違いであるという。

「王孟津は翰墨を以つて声有り、然れども略ぼ経済を知らず。」という言葉も同類で、書家として著名だが、経済には疎いと評している。

王鐸の書法芸術は政治とかわりながら深化した。文人官僚という立場を生かして書法に磨きをかけた。王鐸にとって政治は手段であり、政治権力はパトロンであった。だから、明朝、南明（南京亡命王朝）、清朝と移つて高官を歴任するという柔軟な生き方に従つた。

しかし政治は両刃の剣である。政治の基準（モノサシ）は、芸術の基準ほどには普遍性がない。主権者や権力者が変われば容易に変わる。旧中国では王朝の歴史観に基づいて個人の伝記（列伝）が書かれ、個人の伝記は正史に記録されたものが最も権威があるとされてきた。王鐸の場合『清史列伝』の記事がそれに相当する。しかし、そこには王鐸の政治的な履歴しか書いてない。その上、史官が清朝の基準で書いていたために、ある種の偏向がある。

王鐸伝の由来を調べると、政治的な要請で編纂されたことがわかる。清朝が成立してから百三十年余り経つた一七七六年、乾隆帝は国史編纂所（国史館）に命じて、清朝に降伏して仕えた明朝の旧臣を、功績の有無によつて査定させた。国史館は甲・乙に分類し、それぞれ三つずつに細分して、すべて六段階の格付けをした。

甲編上 「難に遇つて節に殉じた者」 九名

甲編中 「著しく勲積のある者」 十名

甲編下 「略略勞効のある者」 三十二名

乙編上 「紀しるべき功績のない者」 二十三名

乙編中 「曾て罪を獲た者」 十八名

乙編下 「明臣で賊に従い、その後清朝に投誠した者、及び賊党で明に降り、その後清朝に投誠した者」 二十八名、合計百二十名が「弑臣伝」

に登録され、王鐸は乙編上「紀しるべき功績のない者」に名前が見える。国史館は『弑臣伝甲編』二十巻を『清史列伝』の巻七十八に、『弑臣伝乙編』三十七巻を『清史列伝』の巻七十九とし、王鐸の伝記は巻七十九に収まった。以上のように、王鐸の伝記は、乾隆帝時代の偏つた史観で書かれた。

漢族の十分の一の人口に満たない満洲族の清政権は、短期間で秩序を回復して広大な領土を治めるために、漢人官僚の経験手腕を必要とし、再就職を勧めた。それに応じて仕官した官僚が相当数いた。清王朝はこれらを利用しておきながら、後に評価基準を厳しく変更し、弑臣に分類した。王鐸の伝記もそのなかに入り、『清史列伝』の「弑臣伝乙」におさまった。独裁王朝の偏見を含んだ歴史観にもとづいて、政治的な履歴に限定して書かれたのが王鐸伝である。そこに王鐸の実像が後世に正しく伝わらなかった理由がある。

注

- 一 「清朝の国史列伝と弑臣伝」
- 二 『王鐸年譜』 張升編著 上海書画出版社 二〇〇五年
- 三 『好書数行』 劉燦章 上海書画出版社 二〇〇五年
- 四 『王鐸書画編年図目』 齊淵 文物出版社 二〇〇三年
- 五 『王鐸の書法』全五巻 村上三島編 二玄社 一九七九年
- 六 『チナ帝国史』メナード・矢沢利彦訳 二九一頁 岩波書店 一九八三年
- 七 同右 三四五頁
- 八 『宮崎市定全集』巻一三「張溥とその時代」一一八頁岩波書店 一九九九年
- 九 同右 一三二頁、一三八頁

「受理年月日 二〇〇八年九月二六日」